

## ベルギー・ブラッセル日本人学校への教育相談

廣瀬 由美子

(教育支援研究部総括主任研究官)

### 1. 教育相談の経過

#### 1) 研究所における教育相談

ベルギーのブラッセル日本人学校において、特別支援教育を推進しようと意気込んでいた特殊学級担当教諭が、研究所を初めて訪れたのは平成16年度の夏であった。当時ブラッセル日本人学校には、高機能自閉症と医師から診断を得ていた児童や、ADHDの状態像を示す児童がいて、その児童に対する具体的な支援方法を模索していたことや、教員一人一人が特別支援教育に関する知識が十分でなかったこともあり、特殊学級担当教諭は本研究所に助言等を求めていた。

そこで、研究所の所員数名が教諭に対応し、各分野から助言等を行った。さらに教諭は、その後の学校の進捗状況からさらなる助言等を切望し、秋にも再度研究所を訪れ、筆者は、校内支援体制の構築に関する助言等を行っている。


#### 2) メールによる情報提供

特殊学級担当教諭が平成17年の3月で日本に帰国したため、後任の教諭が特殊学級担当と特別支援教育コーディネーターという立場で引き継ぐことになった。

教諭は、ブラッセル日本人学校においても校内支援体制を構築するために、ネット上から日本の特別支援教育に関する情報を収集し、それを『だれでもわかる特別支援教育!』として冊子にまとめた。筆者はその冊子の内容の確認を求められ、メールを通じて修正箇所を回答するなどして対応した。その一部を下記に載せる。

#### 3) ブラッセル日本人学校での教育相談等の実施

その後、研究所にブラッセル日本人学校への講師派遣要請が行われ、6月28日から29日において、特別支援教育の対象である児童生徒の担任へのコンサルテーションと、校内及び欧州地区の特別支援教育コーディネーターならびに特殊学級担任を対象に、特別支援教育の動向やLD等の軽度発達障害のある児童生徒への理解と対応に関する内容で、筆者が講演を実施した。



**2. 障害は無くても、特別な支援を必要とする子供はいます!**

「文部科学省：今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）のポイント」より抜粋  
【基本的方針と取り組み】

障害の程度等に応じ**特別の場で支援を行う「特殊教育」**から障害のある児童生徒一人一人の**教育的ニーズに応じて適切な教育的支援を行う「特別支援教育」**への**転換を図る。**

【特別支援教育】

特別支援教育とは、従来のLD、ADHD、高機能自閉症を含めて障害のある**児童生徒の自立や社会参加に向けて、その一人一人の教育的ニーズを把握して、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服**するために、**適切な教育や指導を通じて必要な支援**を行うものである。

今の制度では、LD,ADHD、高機能自閉症の子供は、特殊学級には入れません！→現行制度でも適応障害があると高機能自閉症でも情緒学級に在籍で指導を受けることはできます。LD・ADHDは、現状では受け皿がありません。



## 2. ベルギー・ブラッセル日本人学校の概要

### 1) 学校概要

- ・設立は1974年で、31年の歴史がある日本人学校である。

小1	小2	小3	小4	小5	小6	小計
48	44	59	31	42	33	257

中1	中2	中3	小計	総計
27	20	14	61	318

- ・児童生徒数は、小学校1年から中学校3年までの総計318人である。
- ・保護者の日本における出身都道府県は、愛知県が圧倒的に多いが、東京都、神奈川県、千葉県、大阪府、兵庫県と様々である。ベルギーでの滞在年数は3年以内が圧倒的に多く、近年、滞在年数も短くなる傾向があり、それは高学年や中学生の占める割合が減少していることから明らかである。
- ・児童生徒の実態では、現地校在籍年数において、37%の児童生徒がベルギー及び他の国の現地校に通学した経験をもっている。特に低学年の児童では、ベルギーでの幼稚園在籍経験をもつ児童が多いとのことである。

### 2) 学校運営および教育課程等

ブラッセル日本人学校の職員は、学校長や教頭をはじめ、理科の専任教員である小学部教務主任が1名、小学部は各学年2学級ずつ配置され、中学部では中2の副担であり中学部教務主任が1名、中1と中3の副担と各学級担任、また特殊学級担任で特別支援教育コーディネーターが1名、合計22名の教員で構成されている。

さらに、日本人学校の特徴でもあるが、現地採用の仏会話担当職員が3名、英会話担当職員4名が指導にあっている。下記の教育課程を参照していただくと、小学部の1～2年生は生活に必要な言語として仏語を、3年以上は仏語及び英語が必修になっており、毎日20～30分程度、会話の学習を実施している。

## 3. ブラッセル日本人学校での教育相談等の概要

### 1) 平成17年6月28日（学校訪問第1日目）

- ・特別支援教育の対象となっている数名の児童生徒を中心に、2校時と3校時は授業参観を実施する。数名のうち、日本の医師から軽度発達障害の診断名を受けている児童生徒と、診断はないが同様な状態像を示す児童生徒であった。
- ・4校時から、管理職およびコーディネーターの教諭を対象に、日本から持参した中央教育審議会の中間報告



図1. 学校内に掲げられた日本とベルギーの国旗



図2. HPより中学部1年生入学式



図3. HPより小学部の児童の様子



図4. 小学部1年生の伝語の授業場面

や、研究所のプロジェクト研究等の報告書を送呈し、特別支援教育の動向等について説明を実施した。

- ・午後からは1時間半程度(予定では50分ずつであったが、実際は協議時間が延びた)、特別支援教育の対象である4名の児童生徒の学級担任と学年主任、コーディネーターの教諭、管理職を交えて、対象の児童生徒のことで心配な点、対応に苦慮している点などを中心に協議を実施した。
- ・それぞれの学級担任に共通することは、LD等の軽度発

達障害について知識を持ち合わせていないこと、対象の児童生徒の言動が理解できず、注意や叱ることで対応している点であった。そこで筆者は、各担任それぞれに対して、軽度発達障害の主な特徴や特性を説明するとともに、一般的に効果があると思われる対応方法を説明した。その後で、自分達の指導や支援を協議しながら、個々の対応の振り返りを行って貰い、その際の適切な対応や継続可能な支援内容や方法を協議し確認していった。

## 教育課程

- 1 平成14年度より実施された、新学習指導要領の趣旨を踏まえ、各教科の授業時数を決定しました。外国語は20～30分の時間、小学部では毎日、中学部では週4日間を設定しました。また、体力の向上を考え、国内よりも体育の時数を多く取りました。

● 週当たりの授業時数 外国語-小学部1,2年生は伝語 小学部3年以上は英伝語選択

小学部	各教科の時間数											合計	
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図工	体育	家庭	道徳	学活		外国
小1	8.6	-	3.6	-	1.6	2	1.4	2.6	-	1	1	2.2	24
小2	8.6	-	4.6	-	1.6	2	1.4	2.6	-	1	1	2.2	25
小3	7.6	2.6	4.6	2	-	2	1.4	2.6	-	1	1	2.2	27
小4	7.6	2.6	4.6	3	-	2	1.4	2.6	-	1	1	2.2	28
小5	5.3	3.1	4.3	3.1	-	2	1.3	2.3	1.3	1	1	3.3	28
小6	5.3	3.1	4.3	3.1	-	2	1.3	2.3	1.3	1	1	3.3	28

中学部	各教科の時間数											合計		
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健	技家	英語	道徳	学活		外国	選択
中1	4	3	4	3	1	1	3	1.3	4	1	1	2.7	1	30
中2	4	3	4	3	1	1	3	1.3	4	1	1	2.7	1	30
中3	4	3	4	3	1	1	3	1.3	4	1	1	2.7	1	30

- \* 総合的な学習については、日課の中には設定してありませんが、すでに本校で取り組んできている「国際交流学習」「情報教育学習」「外国語教育」がこれにあたります。今後さらに、この3つの教育の柱を結びつけ、本校の総合的な学習の目標である、「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てる」、「学び方や心の考え方を身につけ、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようになること」を目標に教育活動に取り組んでいきます。

## 2) 平成17年6月29日(学校訪問第2日目)

- ・午前中は前日の教育相談の続きを行い、特別支援教育の理解とその意義の重要性を説明した。特に高学年や中学生に対する二次的な障害については、関係者の対応の拙さから、時には不登校や神経症的な状態になることも説明した。
- ・午後からは、「通常の学級における高機能自閉症等の児童生徒に対する理解と対応」、「特別支援教育推進のための校内支援体制の在り方」、「障害があると予想される児童生徒の保護者との対応」の3点を取り込んで、講話を求められていた。講話時間は1時間半程度、質疑応答の時間も設けて2時間程度実施した。
- ・学校長からは、欧州地区の日本人学校に対し、ブラッセル日本人学校において特別支援教育の講話の案内が行われていたため、当日は、パリ日本人学校とデュッセルドルフ日本人学校から計4名が来校していた。
- ・講話後の質疑応答では、特にパリやデュッセルドルフ日本人学校の教員から、自閉症スペクトラムに該当する児童生徒の対応に関する質問が出された。しかし全体会では十分な情報交換ができなかったことから、講演会終了

後、個々の学校の特別支援教育の対象となる児童生徒の問題や、具体的な対応方法、校内支援体制に関する課題について協議や助言等を行った。

## 4. 帰国後のブラッセル日本人学校との連携

筆者が帰国してから、学校長やコーディネーター教諭から、2日間の成果について礼状を頂いた。特にコーディネーター教諭は、特別支援教育のさらなる勉強と、校内支援体制の強化に努めることを決意されていた。

平成17年の8月には、ブラッセル日本人学校のコーディネーター教諭が研究所を来所し、筆者によるコーディネートで、数名の職員がそれぞれの分野から最新の知見の情報提供や助言等を行った。また筆者は、その後の児童生徒の様子や、職員の意識が良い方向に向かっていることを知り、嬉しく思うと同時に、さらなる啓発活動を教諭に勧めた。その後、担当教諭のメールから、特別支援教育に関する啓発資料を定期的に職員に出すようになったことを知った。ご本人の了解を得て、その一部を下記に記載する。

ブラッセル日本人学校特別支援教育通信

# ウテカンパ

\*「ウテカンパ」とは、アイヌ語で「手をつなぐ」という意味です

～障害を理由に夢をあきらめさせない～

# NO.1

8月22日  
特別支援教育担当

日頃の特別支援のご協力ありがとうございます。特別支援の研究もいよいよまとめの時期に入りました。今後は、具体的な特別支援のシステム作りとその定着を図り、年度末には、特別支援の研究の成果を文部科学省はもちろんのこと、全世界の在外教育施設に送付する予定になっております。

そこで、2学期より、本校の特別支援の状況をより多くの方々に知っていただくために、(研修の一環として)特別支援通信「ウテカンパ」を発行することにいたしました。これにより、更なる教職員の意識の向上を図り、平成19年度から始まる特別支援の本格的な実施に向けての研修を深めて頂きたいと考えておりますので、よろしく願いいたします。\*何かございましたら、担当にお知らせください。

**お願い1.** 通信は毎回メールで不定期に配信(全日制、事務部)いたします。個人的な情報の中には含まれるかも知れませんが、くれぐれも「プリントアウト」をしたり「外部に配信」したりしないでください。

**お願い2.** 派遣でこられている先生は、帰国する場合には、必ず「削除」してください。  
\*他のファイルも同じだと思いますが・・・。

**お願い3.** 特別支援に関する日本の現状なども掲載していきます。私の方でなるべくポイントを絞って載せますので、お忙しいとは思いますが、時間がある時に「さあつと」で良いので、目を通してみてください。

## 5. おわりに

今回の日本人学校訪問において、研究所の相談業務として、海外の日本人学校に直接出向き、主に教員を対象にしたコンサルテーションを実施したのは初めてであった。ブラッセル日本人学校を訪問した際、特別支援教育の対象者が数名いたことに驚いた筆者が、学校長にその理由を質問したが、最近の企業は子どもの障害の有無に関わらず海外派遣をするらしいとの弁が印象的であった。

そのような意味からも、海外の日本人学校や関係者からは、今後も多くの相談があると予想される。日本人学校の特徴は、教員の任期がおおむね3年である。今回のブラッセル日本人学校においても、平成15年度に派遣された教員は、実質の特別支援教育が開始される前の情報しか無いと言っても過言ではない。そのため、実際に研究所の職員が訪問して教育相談をすることは難しいにしても、研究所のHPで十分な情報が提供できるよう努力していく必要があるだろう。

